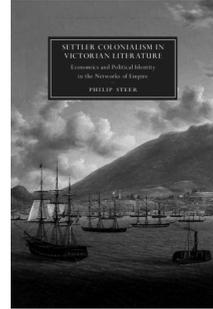


## 書 評

Philip Steer, *Settler Colonialism in Victorian Literature: Economics and Political Identity in the Networks of Empire*

(Cambridge: Cambridge University Press, 2020)

田中 孝信 (大阪公立大学)



Edward Gibbon Wakefield は、*A Letter from Sydney: The Principal Town of Australasia* (1829) の中で「ある場所の方を見るのとある場所から見るのとでは大きな相違がある」(202に引用・傍点は原文イタリック)と述べているが、イギリスの入植者帝国 (settled empire) を分析した本書は、まさに彼の見解の正しさを証明している。スティアは、従来ヴィクトリア朝研究者の間で一般的であったイギリス本国を起点とした一方的な眼差しに疑問を呈し、オーストラリアやニュージーランドといったオーストラレーシア側から本国との相関関係を捉えようとするのである。彼は、入植者植民地主義 (settler colonialism) がヴィクトリア朝文学に及ぼした影響を把握するために「現時の批評手段」(5) がいかに不適切であるか、必要とされるのは、「明確な帝国ネットワークから現れる文学的影響や交換の特別なネットワーク」(7) に根差した、形式面にこだわった方法を実践することなのだと主張する。これは、Edward Said が、帝国の証拠を、19世紀イギリス小説に帝国がコンテキスト上も主題としても取り上げられていないところに見出したのとは対照的と言える。結果として、実に興味深いことに、入植者植民地から本国市場への経済的および文化的形式の「逆移動」(187) が浮かび上がってくるのである。そして、あまり知られていない植民地の著述家に着目するのみならず、Charles Dickens や Anthony Trollope など本国の著名な小説家にも、ヴィクトリア朝研究を植民地視点から捉えるという方法によって、新しい光を当てるのだ。

先行研究を十二分に踏まえた充実した Introduction に続いて、本書は4つの長く込み入った、概念的に複雑な章から構成されている。いずれの章

も目指すのは、「イギリス人の主体性や社会性に係るヴィクトリア朝の規範的な概念に何らかの形で挑戦するような植民地の発展や危機の顕著な段階」(29)について考察することである。第1章“*The Transportable Pip: Liberal Character, Territory, and the Settled Subject*”は、スティアが「入植の言語」から成る「性格の論理」(37)と呼ぶところの、ヴィクトリア朝の性格と主体性のモデルについて探究している。最初に取り上げられるのは、経済学 (political economy) の萌芽的著作であるウェイクフィールドの『シドニーからの手紙』である。彼自身はシドニーを訪れたことはなく、実際はロンドンのニューゲイト監獄で執筆され、組織的植民地化 (systematic colonization) が提唱されている。ウェイクフィールドによれば、オーストラリアでは荒地が過剰なまでに広がり、入植者は「野蛮な状態に置かれている」(46に引用)。彼らの墮落は、資本主義的社会関係が、無益な広大な土地によって妨げられているからなのである。スティアは、このようにイギリス人の性格を土地との空間的關係によって決定されるものとして捉えようとするウェイクフィールドの姿勢に、18世紀スコットランドの啓蒙主義の段階形態理論 (stadial theory) を見て取る。この理論は、放浪状態から農業、そして現代性へと発展を通時的に捉えるのだが、ウェイクフィールドは、共時に重点を置き、イギリス人移民には、放浪か定住かの2つの選択肢があり、放浪癖をつけた場合は経済活動や文化的社会の構築ができなくなり、他方、定住することで安定した性格 (settled character) を獲得できると考えたのである。組織的植民地論の根底にあるのは、入植者植民地は「イギリス社会の拡張」(59)と見なされるという考えであり、それをスティアは、Edward Bulwer-Lytton の *The Caxtons: A Family Picture* (1849) とデイケンズの *David Copperfield* (1849-50) に読み取る。特に後者における第63章「訪問者」の分析は興味深く、帝国の最果てにおいてもイギリス人としてのアイデンティティが繰り返されていることが分かる。

次にスティアが性格形成に関する理論として取り上げるのは、オーストラリアで実際に流刑囚の更生に携わった Alexander Maconochie が現地で作案した点数制 (Mark System) である。これによると、刑罰は労働と善行の観点から測られ、点数として数量化されることになり、点数は日単位で損得が生じる一種の通貨として機能することになる。ウェイクフィールドの

場合同様、枠組みとして経済学の法則を用いているのだが、空間性よりは時間性を重視しており、囚人は、点数制によって、「長期にわたる私利を適切に計算する」(64に引用)論理を内面化できるのである。それが目指したのは、労働の習慣と文化の吸収によって、不従順な個人が時間をかけて社会適合を遂げることだった。スティアは、その意味で点数制を教養小説と同質と捉えて、どちらも「性格の内的支配と時間を経た性格形成プロットに語りの形式を与えている」(66)と述べている。点数制は、ディケンズが関わった売春婦更生施設ユレイニア・コテッジの運営指針にも採り入れられた。そればかりではない。スティアは、ディケンズの *Great Expectations* (1860-61) のピップの人間の成長を、Jeremy Bentham のパノプティコン的な監視の段階から、流刑囚マグウィッチとの再会を契機とした、点数制における個別事例史のように過去を告白する段階への移行に読み取るのである。

第2章“Gold and Greater Britain: The Australian Gold Rushes, Unsettled Desire, and the Global British Subject”は、1850年代のオーストラリアでの金鉱発見と、それに伴う狂乱の中で段階形態理論が顧みられなくなっていく過程を追っている。最初に取り上げられる、スコットランド生まれのオーストラリアの作家 Catherine Helen Spence の小説 *Clara Morrison: A Tale of South Australia during the Gold Fever* (1854) は、金の採掘をリアリズムとは対照的なロマンスとして表し、投機や社会秩序の転覆と関連づける。ゴールドラッシュによって性格形成に関する新しい理論が明確な形を取り出すのは、オーストラリアで初めて出版された経済学の書、W. E. Hearn の *Plutology: or, The Theory of the Efforts to Satisfy Human Wants* (1864) においてである。これは、古典経済理論の中核を占めていた労働と生産よりも、個々人の欲求と消費の優位性を主張したのだった。スティアによれば、この認識の衝撃は大きく、ゴールドラッシュを経験し本国に戻った著述家たちは、欲求によって定義されるイギリス人の主体に焦点を当てた書物を執筆した。「限界革命」の火ぶたを切った経済学者 W. S. Jevon の *Theory of Political Economy* (1871) やトロロープの小説 *John Caldigate* (1878-79) は、スティアによれば、領土の枠を越えた新たなイギリス人の主体性解釈に貢献したのである。それは、ヴィクトリア朝の入植者帝国を「一貫した空間」(113)とし

て思い描くことを意味する。この具体例として、スティアは『ジョン・コールディゲイト』を『大いなる遺産』と比較し、ピップが、マグウィッチの富を最終的に拒絶するのに対して、植民地で得た富を自分の地所に注ぐコールディゲイトは、母国の伝統的世界がより広い入植者帝国と密接に結びついていることを認めていると指摘している。ゴールドラッシュを境とした本国と植民地との関係の変化が如実に示されていると言える。

第3章 “Speculative Utopianism: Colonial Progress, Debt and Greater Britain”では、まず、第2章で記されたようにイギリス人の主体性が脱領土化したことで、新たに帝国のアイデンティティを想像する基盤を構築しようとする動きが高まると論じられる。これが、イギリスと入植者植民地との連邦として一般に知られる「グレイター・ブリテン」である。この観点から、ニュージーランドの文学と経済学が取り上げられる。投機は、ニュージーランドでは母国からの金融投資の形をとった。入植地の著述家たちは、イギリス人としてのアイデンティティを利用して本国の金融家たちに将来的な発展を信用させ、投資を促したのである。それに呼応するように、スティアが「投資的ユートピア思想」と呼ぶところの文学上の一形式が誕生した。この例として、ニュージーランドに牧羊業者として移住した Samuel Butler のノンフィクション *A Fist Year in Canterbury Settlement* (1863) とユートピア小説 *Erewhon, or, Over the Range* (1872) が挙げられる。さらに、1870年代の投資的ユートピア思想が政治的利害関係とも絡んでいたことを明らかにするために、スティアは、ニュージーランドの首相を務めた Julius Vogel の著作を引用し、ニュージーランドを安全な投資先として宣伝するに際して、その根拠を入植者のイギリス人的性格に置いていたと論じる。しかし、過度の負債が明らかになるにつれて、ユートピア思想とは逆の、トロロープの *The Fixed Period* (1882) のようなディストピア作品が登場することになる。植民地の将来性と若さは、今や、安定した組織的伝統の欠如として再定義され、将来的価値の源泉というよりはむしろ、欠陥と見なされるようになるのである。そうした本国の悲観的な植民地観に対して、世紀末のニュージーランドの著述家や政治家たちは、植民地の帯びるイギリス的価値を再度主張することで、財政上の信用度を回復しようとする。この時期の投資的ユートピア作品として、ヴォウゲルの *Anno*

*Domini 2000; or, Woman's Destiny* (1889) とニュージーランドに移住した国教会の牧師 Henry Crocker Marriot Watson の *Decline and Fall of the British Empire, or, the Witch's Cavern* (1890) が取り上げられる。後者において、小規模農業や牧畜業に従事する本国はアナクロニズムとして「古代イギリス」と呼ばれ、投機的価値を持った「オーストラリア共和国」(158に引用)と対比される。*London: A Pilgrimage* (1872) における Gustave Doré の挿絵「ニュージーランダー」に描かれた未来の廃墟と化したロンドンを想起させるような世界が提示されるのだ。だが、忘れてならないのは、本国と入植者植民地との間には共通のブリティッシュネスが存在するということである。このブリティッシュネスゆえに、世紀末の地政学は、入植者帝国をイギリスの世界規模での安全にとって必要不可欠な存在として再定義するのである。

第4章“Manning the Imperial Outpost: The Invasion Novel, Geopolitics, and the Borders of Britishness”では、地理的範囲が広がる。1870年代以降の本国イギリスに見られた外国の経済的・軍事的脅威への反応として、George Chesney の *The Battle of Dorking* (1871) のような小説が書かれるようになるのだが、これは、帝国の周縁にも見られた現象である。その例としてスティアは、George Ranken の *The Invasion* (1877) と Kenneth Mackay の *The Yellow Wave* (1895) を挙げる。そして、侵略に対して立ち向かう「入植者の男らしさ」(168) を、母国のイギリス人のアイデンティティと区別する。侵略小説は、国土防衛のプロットを、フロンティアでの経験から生じた本能的で即興的なゲリラ戦として構築するのである。入植者が外国からの攻撃に対して抵抗するとき、彼ら自身がオーストラリアの原住民の立場に置かれ、愛国心に富む「一種の土着化したイギリス人氣質」(181) を帯びるのである。次にスティアは、第2次ボーア戦争 (1899-1902) に論を進め、この戦争で、入植者の男性性は、「侵略に対する防衛のコンテキストから帝国による侵略の任務に移し替えられ」(183)、本国の地政学的目的に適合されることになると述べる。Erskine Childers の侵略小説 *The Riddle of the Sands* (1903) は、ヨーロッパを舞台に、母国に迫る戦争の危機に対抗するには、母国の習慣を捨て、入植者の「無骨な男性性」と「激しい愛国心」(192) を身につけることが肝要であるとする。最後にスティアは、第1次世界大戦のさなか、ダーダネルス戦役 (1915) において多数の死傷者を出したアン

ザック軍団の活躍を描いたJohn Masefieldの*Gallipoli* (1916) を取り上げる。メイスフィールドはこの戦役を叙事詩的ロマンスの地位にまで高め、入植者植民地出身の兵士たちの男性性を「真のむき出しの男らしさ」(198に引用)と表現して賛美する。だがスティアは、この大げさな神話化の背後に「帝国の死権力(necropolitics)」(199)を読み取る。彼は、アンザック軍団をその功績ゆえに「イギリス人の男らしさの新たな宝庫」(200にJames Belichから引用)としての「利益性」(200)と、入植地への移民が元来帯びる、Karl Marxが言うところの「使い捨ての産業予備軍」(200-01に引用)ゆえに「評価されない余分なもの」(200)という2つの真逆の意味を併せ持つ「剰余価値」(200)と見なすのだ。こうした文学形式のロマンスと経済学の剰余価値との衝突を、「ヴィクトリア朝の入植者植民地を構成するブリティッシュネスの境界における一つの最後の残酷な争い」(201)であると述べて、第4章を締めくくる。

帝国の中心地イギリスに視点を定める研究方法への挑戦は目新しいことではない。また、当時の本国における動向、例えば、生産志向社会から消費志向社会への変化、退化への恐怖、黄禍論の高まり、ポーア戦争時における「男らしさ」の証しとしての「健全な野蛮性」礼賛といった現象との関係性の中で、入植者植民地での同種の動きを追えば、より考察が深まっただろう。また、スティア自身が認めるように、原住民と入植者との出会いや闘争の歴史がほとんど言及されていない。しかし、オーストラリアとニュージーランドという2つの入植者植民地に焦点を絞り、歴史学、文学、経済学のテキストを巧みに操ることで、「移動する著述家のネットワーク」を通して生じた本国との双方向性の影響と、結果としてのイギリス人のアイデンティティの変化を証明した点は、大いに評価すべきである。見事なまでに知的で、驚くほどに多彩な証拠に裏打ちされた本書は、母国と入植者植民地との一筋縄ではいかなない結びつきを浮き彫りにすることで、従来のヴィクトリア朝研究を不安定化し(unsettle)、脱植民地化する(decolonize)ほどの衝撃を与えてくれるのである。